

2011.3.11

大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞き書きした

《 いったえ、むかしばなし、はなし 》

宮城県教育委員会の委託を受けて「宮城県民話伝承調査」をおこなったのは、1985年から1988年の3カ年でした。いまから、25年あまり前のこととなります。その時に、民話を語ってくださった方は388人、聞き書きした宮城県各地の民話は2513話におよびました。

これらの記録は、『宮城県文化財調査報告書第130集—宮城県の民話』（1988年3月刊/責任編集・小野和子）としてまとめ、宮城県教育委員会から出版されましたが、当時の区割りによる74市町村から、3話乃至5話を選んで活字化するという形でした。したがって、集めた民話の約1割に当たる274話のみの収録となりました。残りの2200話あまりの民話の記録と、語ってくださった話者の声は、わたしたちの手許に置かれたままでした。

これらの貴重な記録と語られた声は、わたしたちが採訪して集めた他の民話とともに、目下、せんだいメディアテークとの協働により「民話 声の図書室」の大切な財産として、みなさんと共有すべく作業をすすめています。

ここにご紹介する民話は「民話伝承調査」をおこなった折に記録したものです。

2011年3月11日、津波に襲われて、被災した集落で、かつて聞いた民話の一部です。

語った方の大部分は、震災の前にすでに亡くなっています。そしていま、語られた土地の姿は変わり果てました。しかし、手許に残った語りは、ここで生きていた人々の姿を、ありありとわたしたちに伝えてくれます。

それは、この土地特有の話もあれば、そうでないものもあります。また、実際の体験談もあります。それらすべてを含めて、「この土地で語られていた民話」という括りでまとめてみようと考えました。よその土地からもたらされた話や、隣町での出来事を語るものや、遠くの島のいわれを教える話、また全国的に話型がみられる民話など、これらはさまざまな経路でムラへ持ち込まれ、この地の人々の胸であたためられて、語りつづけられてきた話群です。

「2011.3.11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞き書きした《いったえ、むかしばなし、はなし》」というテーマを掲げて、これからもシリーズで、みなさんに届けていく計画です。

## 第1話 江島のキノコ

むかしむかし。

江島<sup>えのしま</sup>には気味のわるい化け物があるつつう評判だったんだと。

その時分、そこにおだずもつこな（お調子者の）兄弟がいたんだと。

ある晩のこと、二人して炉端<sup>ろばた</sup>で豆煎<sup>い</sup>って食っていたら、小こいキノコ<sup>ちやつ</sup>がぴよこんと灰のなかから顔を出して、「その豆、おれにもけらいん（ください）」

って、豆をほしがると。

しかたがないから、少こぼり<sup>びゃっ</sup>、そのキノコにやったんだと。

そうしたら、

「まっと、まっと、けらいん（もっと、もっと、おくれ）」

と、また、せがむんだと。

「おかしいなあ、このキノコの野郎」

首をかしげて、二人して見でだっけ、

〈こいつあ、ひょっとして化け物かもしれねえ〉

と思って、わきの釜<sup>かま</sup>っこで煮たっていたお湯を、しゃなすに（いきなり）ざわーっと、ぶっかけてやったんだと。

したらば、そのキノコ、見る見る<sup>おが</sup>育って、天井までのびていったと思ったら、大きなふんぐり<sup>おっ</sup>（金玉）をだらりとぶらさげた古タヌキになって、どたり倒れてきたんだと。

その腹、ふたつにぶっ裂<sup>ちや</sup>けて死んでいたんだと。それからは、化け物が出なくなったんだとき。

えんつこ まんまん

## 第2話 大ダコの宮

むかしむかし。

志津川の旭ヶ浦あさひがうらはタコの産地で、名が知られていたんだよ。

その年も、タコの大漁で、浜はうんとにぎわっていたと。ところが、たまげたことに海へ出ていった若わけ者もんが、つぎつぎ行方知れずゆくえになって、さっぱりけえ帰ってこねえんだと。

そんなことがつづく、みんなおっかなくなつてやあ、だんだんと海へ出なくなり、浜はさびしくなつていったんだと。

ここに一人の若わけ者もんがいて、目立たねえ野郎だったが、しっかりしたやつで、

〈このままでは浜はさびれてしまう。どうして仲間は帰らねえんだ。その理由わけをたしかめねばなんねえ。〉  
そう思つて、ある夜、月がこうこうと照る浜に立っていたんだと。

そうしたら、海のむこうから、なんともいえねえ妙たえなる楽がくの音ねが聞こえてきたつんだ。

〈ふしぎなことがあるものだ。〉

若わけ者もんは舟を出して、音のするほうへ漕いでいったれば、目のまえに、ぴかぴかと金銀に光る洞窟が、ぽかっとあらわれたんだと。妙たえなる楽がくの音ねは、そこから流れてくるんだつたと。

ちかづくと、きれいな女おなごたちがいて、

「こっちさ来う。こっちさ来う」

と招くので、光る洞窟にはいっていくと、そこは宮殿になっていたんだと。

なかにはお姫さまがいて、いっぱいご馳走つつおうがならんだ部屋につれていかれたんだと。

あの楽がくの音ねも聞こえてやあ、若わけ者もんはまるで竜宮にいるような心地がして、うっとりしていたら、お姫さまがよつてきて、その手をとつたんだと。

その手の冷ひやっこいこと、冷ひやっこいこと、若わけ者もんはぞつとして、思わず腰の網針をとつて、お姫さまの急所めがけて、

「えいっ」

と、ひと突きしたんだと。

そうしたつて、たちまちあたりが闇になって、若わけ者もんは氣を失つて倒れてしまったと。

夜ようが明けて、朝日のなかで目をさましたれば、大きな化け物ダコが、若わけ者もんの上おつにのしかかつて死んでいたんだと。見まわしたれば、あたりには、食い荒らされた人の骨が散らばつて、いちめん真っ白おつになっていたんだと。

若わけ者もんが持っていた網針は、ヤナギの木でつくつたもので、それからは、タコを釣り上げると、すぐにヤナギの針で急所を突くようになったんだと。

浜はまたにぎやかになつて、ここのタコは味がよくて、うんとよろこばれているんだよ。

### 第3話 天女の塚

むかし。

作兵衛さんという漁師がいて、ツバキの花がうつくしく咲くころ、<sup>つばきしま</sup>椿島へいったんだと。

舟漕いでいくとなあ、<sup>たけしま</sup>竹島のほうでにぎやかな音がしたそう。

「はて、だれがこういう音楽をならしていんだべか」

って、耳すまして聞いたら、竹島から聞こえてきたそう。

「ふしぎなこともあるものだ。どれ、ひとつ舟寄せて見てみよう」

って、竹島さ舟をよせてみたんだと。

竹島には空洞になっているところがあるから、そこさはいっていくと、なかにタタミ六畳ほどの平たい石があつて、その上で、きれいな<sup>おなご</sup>女たちが<sup>まい</sup>舞をまっているんだと。

「いや、これはたまげたなあ。どこから、来た人たちだべ」

作兵衛さんは首かしげながら、そろっそろっ、はいっていくと、舞をまっていた<sup>おなご</sup>女たちは、一人の<sup>おなご</sup>女だけ残して、みんなして空へのぼっていったんだと。逃げてしまったんだと。

「こいつあ、天女たちかもしゃねえ。それにしても一人だけおいていかれて、気の毒な・・・」

作兵衛さんはそう思ったんだと。

一人だけ残された天女は白い犬をつれていたそう。

その犬を抱いて、しくしく泣き出したから、作兵衛さんはかわいそうになって、その天女と白い犬を家さつ<sup>けえ</sup>れて帰ったんだと。

ところが、なにをいっても返事もしないし、なにをやっても一口も食べない。犬も、なんにも食べないんだと。

食べたのは干し柿とクリをちょっとばかりだったから、七日もすると、さすがに弱ってなあ、とうとう、天女も白い犬も死んでしまったんだと。

死んでから、そのポケットを見たら、湯呑み茶碗ひとつと、エノキの実がひとつはいつていたそう。

知らない土地で死んでしまった天女と白い犬をあわれに思ってなあ、作兵衛さんは、塚をつくってねんごろに葬ったそう。そして、ポケットにはいつていたエノキの実もいっしょに埋めてやったそう。

それが、いまや大木になって、ほれ、そこに両手を広げて立ってっぺ。

そして、その根もとには、作兵衛さんがつくった<sup>ちっ</sup>小ぢやな<sup>ほこら</sup>祠も見えっぺ。

そうそう、忘れるどこだった。

「その天女からは、なんともいえない、いい匂いがした」

作兵衛さんはそういつていたそう。

## 第4話 姫こ岩

むかし。川の上に館<sup>たて</sup>があって、この世のものと思われねえきれいなお姫さまがいたそう。なんでも身分のある人の血筋だという者もいたつけよ。

そのお姫さまが年頃になって、ますます美しくなったのは良<sup>い</sup>がったが、なんだか、日増しに弱<sup>い</sup>っていくように見えるんだと。

乳母が心配してなあ、お姫さまの部屋にいくと、そこの縁側が、ぐっしょりと濡れているんだと。その後も、たびたび、縁側が濡れていて、それだけでねえ、お姫さまの部屋から、人の話し声が聞こえてくんのだと。乳母は、夜もずっとお姫さまの部屋のかげに隠れて、ようすを見ていだつけ、たまげたことに、真夜中にお姫さまの部屋へしのんでくる男がいたんだと。

乳母はお姫さまにいったそう。

「こんど若衆がしのんできたら、袴<sup>はかま</sup>の裾<sup>すそ</sup>に針を三本縫いつけておきなされ」

お姫さまはいわれたとうりに、しのんできた若衆の袴の裾に針を三本、つく、つく、つく、と縫いつけたんだと。

そしたれば、空がにわか曇<sup>曇</sup>って、天地雷鳴して、大嵐になったつつうんだ。

若衆は、身もだえして苦しみはじめ、そうして、水かさの増した川へ走っていったかと思ったら、濁流に身を投げてしまったんだと。

それっきり、若衆はあらわれなくなって、お姫さまの身体はもとのようになっただけでも、若衆のことを想<sup>おも</sup>ってか、お姫さまはふさぎこむ日が多くなったんだと。

ある日のことだった。

沖の方に、見<sup>見</sup>なれない一<sup>一</sup>そうの軍船があらわれて、浜<sup>浜</sup>へ浜<sup>浜</sup>へと走<sup>走</sup>ってくるんだと。見れば、あの若衆が舳先<sup>へさき</sup>に立<sup>立</sup>って舵<sup>かじ</sup>とりをしている。

お姫さまは、それに気がつく<sup>く</sup>と、着物の裾<sup>すそ</sup>をひるがえして浜<sup>浜</sup>へ走<sup>走</sup>って行って、そうして、白い腕<sup>うで</sup>で水<sup>みづ</sup>をかきながら、ずくずく海の底<sup>そこ</sup>に沈<sup>しず</sup>んでしまったそう。

海の水がお姫さまをのみこむと、黒い軍船も、ぺか<sup>ぺか</sup>と姿<sup>すがた</sup>を消<sup>く</sup>したと。

お姫さまが沈<sup>しず</sup>んだあたりの海の底<sup>そこ</sup>深くに、白い大きな岩<sup>いわ</sup>があらわれて、この岩<sup>いわ</sup>のことを、漁師<sup>いし</sup>たちは「姫こ岩」と呼<sup>よ</sup>ぶようになったんだよ。

あの若衆は、なんでも魚<sup>いし</sup>のタラ<sup>たら</sup>の化身<sup>けんしん</sup>だったつうことで、袴<sup>はかま</sup>の裾<sup>すそ</sup>に縫<sup>ぬ</sup>いつけられた三本<sup>さんぽん</sup>の針<sup>はり</sup>の毒<sup>どく</sup>がまわって、川<sup>かわ</sup>をのたうちまわって死<sup>し</sup>んだそう。そのときから、この川<sup>かわ</sup>を「毒川<sup>どくがわ</sup>」と呼<sup>よ</sup>んだけつども、それはあんまりだつうことで、伊達政宗公<sup>いだてまさむね</sup>が、「思<sup>おも</sup>い川<sup>がわ</sup>」と変<sup>か</sup>えられたそう。

タラは、川<sup>かわ</sup>をながれて松岩<sup>まつい</sup>までいったつうが、それは大<sup>お</sup>きな大<sup>お</sup>きなタラ<sup>たら</sup>で、馬<sup>うま</sup>に積<sup>た</sup>んだら五<sup>ご</sup>駄<sup>だ</sup>もあつたので、タラ<sup>たら</sup>が流<sup>なが</sup>れ着<sup>き</sup>いたところを「五<sup>ご</sup>駄<sup>だ</sup>鱈<sup>たら</sup>」と呼<sup>よ</sup>ぶようになったんだと。

お姫さまの命日<sup>めいじつ</sup>には、家来<sup>けらい</sup>のタラ<sup>たら</sup>たちが姫こ岩<sup>ひめこいわ</sup>のあたりへ、いっばい集<sup>あ</sup>まってくるので、年に一回<sup>いちど</sup>は、このあたりでタラ<sup>たら</sup>の大漁<sup>たいりく</sup>があるんだとや。

## 第5話 ヘビの女房二話

黄金沢の金山<sup>かねやま</sup>ではたらく若者がいて、毎晩、上手に笛を吹いていたら、若<sup>わけ</sup>え女<sup>おなご</sup>の人がね、笛にさそわれて、そこにあらわれたんだと。

それから、夜になるといつもいつも、ふたりで笛を吹いたり聞いたりして、たのしんでおったと。そうしてうちに、ふたりは夫婦になって暮すようになったと。

一年がたち二年がたつうちに、若者は、なんだか女<sup>おなご</sup>がそばさ来<sup>く</sup>つと、ひゃーつとした冷てえ気配を感ずるようになって、なんかだかいやになったんだと。

〈これは普通の女<sup>おなご</sup>でなくて、なお、化け物だったとしても、動物<sup>けだもの</sup>獣であれば、ほとる（あつたかい）はずだが、ひゃつとするからには、へビか魚の化け物ではないべかなあ〉

そう思ったら、じっとしてられなくてね、ある晩、こっそりと逃げ出すことにしたんだと。

そうして、逃げて逃げて、岩手<sup>いちのせき</sup>の一関近くのところさ、鉄の家を建てて隠れておったと。

女<sup>おなご</sup>は大蛇<sup>だいじゃ</sup>になってね、ヌタヌタヌタヌタと追<sup>ほ</sup>っかけてきて、その鉄の家を七回り半、ぐるぐる巻きに巻いたつけえ、その鉄の毒にあてられてなあ、死んでしまったんだと。

男は、こうして助かったんだね。ところが、助からなかった男もいたんだつつうよ。その話はね…

ある若者が炭焼きして暮していたんだと。そしたら、ある晩に、なんともいわれねえ美しい女<sup>おなご</sup>があらわれてね、男にいったんだと。

「こんな炭焼き稼業<sup>あ</sup>しても、うだつ上<sup>あ</sup>んねえべ。いいこと教えるから、その唐<sup>とぐわ</sup>鋤<sup>あ</sup>持って、おれの後さついてあべ（ついておいで）」

こういうので、若者はついていったんだと。そしたらね、その女<sup>おなご</sup>、

「ここを掘ってみれ」

っていうので、掘ってみたら、なんとそれが金<sup>あ</sup>鉱<sup>あ</sup>だったつうんだね。

金<sup>あ</sup>鉱<sup>あ</sup>を掘り当てたんだからしゃ、そりゃ、たいしたことだべさ。

大よろこびして、そのあと、ふたりは夫婦になって、裕福ないい暮らししていたんだと。

ところが、しばらくずっと、若者は首かしげて考え込むようになったんだと。

〈自分の女房は魔物ではないか〉

そう思うようになったんだと。

そしたらば、おっかねくて、おっかねくて、我慢できねえのしゃ。

ある晩、こっそりと南部岩手の山のほうまで逃げたんだと。そして、空いている家があったから、そこさ隠れていたんだと。

女房は魔物の本性あらわしてね、やっぱり大蛇<sup>だいじゃ</sup>になって追<sup>ほ</sup>ってきたつつんだよ。その家を七回り半巻きつけて、家をこわし、男を殺して、みんなだめにしたつつうことだよ。

## 第6話 キツネのお産

おっば  
追波ってところにね、おおつき  
大槻ってお医者さんいたったんですが。

その先生、お産、うんと上手でね、そして、赤ん坊が好きでね、お産っていえば、どこまでもいくんだったと。

ある闇夜の晩、大槻医者を迎えにきた人あったんだと。

「大槻先生。難産で困ってたから、助けてください」

ひとりの男が、馬つれて来たってね。

「どこだ」

って聞いても、男はその場所を語んねえつうんだね。

「じゃあねえな。迎えに来られたんだから」

って、馬さ乗って、かなり長い時間歩かせらったつうんだね。

そして、ずっと奥に高い山があるんだけども、そこにたいした立派な家があつて、そこへつれていかれたんだと。どこ見ても、ぴかぴかでね、奥の座敷では、奥さんが難産で苦しんでいたんだと。

〈はて、おかしいことがあるもんだ。こういうどこに立派な家、あつたべか〉

って、首かしげながら、まず、お産を無事に済ませて、送り出されたつうんだね。

札束どっさり提灯と持たされて、馬に乗って帰<sup>けえ</sup>ってきたんだと。

そうして、家さ着いたところが、提灯を外さおいたまんまだつうんで、

「せっかくもらった提灯だ。そいつがあれば、闇夜でも歩くにいい」

って、提灯を取りに外さ出してみたら、提灯はなくて、そのかわりに山鳥の死んだのが横になっていたんだと。

「あれ、れ、れ、れ、れっ」

家の中さはいって札束をみたら、なあに、札束は柿の葉っぱだったんだとさ。

## 第7話 馬をあやつるキツネ

おれ、若<sup>わ</sup>えどきだから、馬さ乗って草刈りにいったのしゃ。

したら、いたんだね、キツネが、向こうに。

なんだか、馬の野郎が、

ふっふ ふっふ ふっふ

って鼻ならしてやあ、さっぱり歩かねえんだ。

〈なんだべなあ〉

とって、見ても、わかんねえんだね。

ほれから、また、歩かせべとしても、馬は、

ふっふ ふっふ ふっふ

って、わかんねえから、木さ結<sup>ゆ</sup>つけておいたのしゃ。

ほうして、おれは、三束ほど草刈ってから、馬を見たらおとなしくなってんだね。

〈よかった。よかった〉

とっていたら、向こうから姿見せたもんだ、キツネの大將が。

そろっ、そろっと来てね、馬の三メートルくらいまで近づいてきたから、おれ、草刈り止めて見てたのしゃ。

キツネは馬のそばさいて、チョッチョッチョッとやってたっけが、そうすると、馬はじっとして動かなくなるんだね。

ほしたら、こんど、馬のまわりを、ぐるぐる回りはじめたんだね。十回くらいも回ったかな。馬<sup>ま</sup>っこも、それについて十回ほど、ぐるぐるぐるぐる回ったね。

そしたら、やつは、馬の口ところに来て、ひょっと立ち止まったんだね。馬はびっくりして、またこんどはひとりで回り出したのしゃ。

おれ、見てて、馬がかわいそうになってやあ、木の根っこあったから、そいつ、ぶん投げてやったのしゃ。

そしたら、回りながら木の根っこを、ちゃんと受けるんだよ、キツネ野郎。

また、投げたっけえ、こんどは、キツネ、逃げたのしゃ。

「野郎、また来るな」

おれ、草刈りの鎌持っていたからね、そいつ握って隠れていたんだ。

案の定、来たね。ずっと上のほうから、来たね。

カサッ カサッ カサッ

そばまで来たとき、おれ、さっと立ったの。

したら、やつ、飛び上がったね。一丈の余<sup>よう</sup>も（三メートルあまり）。

そのキツネは、馬に魔をいれて、腑抜けにすつとこだったんだね。

普通のキツネ野郎ではなくて、足のうんと長い、背中が赤くて、腹が白くて、ただものでねえキツネだったね。

あんなキツネはあんまり見たことなかったね。忘れらんねえなあ。

## 第8話 孫娘に化けたタヌキ

わたしのおふくろのじんつあんの話なんだけどね。

馬さ魚つけて、飯野川<sup>いいの</sup>まで運ぶ仕事している人だったの。

むかしの道路はひどくて、十二曲がりって、じぐじぐ、じぐじぐ曲がってる道をいって、白浜さ出るんだっ  
たの。

じんつあんの<sup>けえ</sup>帰り、いつもおそいから、わたしのおふくろがね、<sup>むけ</sup>迎えにいったんだと。

「こりゃ、春子（おふくろの名前）、じんつあん、もう<sup>けえ</sup>帰る頃になっぺしも、あそこで、またキツネにひかされ  
て、土産<sup>ちようちん</sup>の物とられっから、<sup>むけ</sup>提灯つけて迎えにいけや」  
って、いつもいわれるんだったと。

ほんで、<sup>むけ</sup>迎えにいったときはだまされねえんだけっども、なにか忙しくて<sup>むけ</sup>迎えにいけねえと、かならずだま  
されるんだね。

「なに、じんつあん。油揚だの買うと、だまされっから、買わねえでいいからな」  
っていっても、いつも豆腐だの、油揚だの買ってくんだから。

あるときのこと。

「よしっ、今日こそだまされねえでいくべな」

腹きめてからに、じんつあん、来たんだどしゃ。

ほすと、白浜の坂をのぼる道で、キツネ、おら家<sup>い</sup>のおふくろの春子に化けて来たんだと。

「なんだ、春子、ぬしゃ、早く来たな。どれ、<sup>ま</sup>馬っこさ乗せるから、乗れ、乗れ」  
って、春子に化けたキツネを<sup>ま</sup>馬っこさ乗せたんだと。

じんつあん、それがキツネだとわかってたんだね。

「春子あ、こんなに遠くまで来っことねえから、こいつあ、キツネにちがいにえ」

そう思って、馬の手綱<sup>たづな</sup>ひっぱって、わかんねえように、春子に化けたキツネの首たさ掛けて、うしろから<sup>ぼ</sup>追っ  
きたと。

家の近くまで来て、

「ああ、いま春子、<sup>むけ</sup>迎えにきたから、<sup>ま</sup>馬っこさ乗せてきた」

って叫んだら、春子に化けてきたキツネ、<sup>ま</sup>ぼーんと馬っこの背中から飛び降りたんだと。

首たさ、手綱が掛かってっから、落ちた拍子に首をしめられて、死んでしまったんだと。

それが、キツネだとぼり思っていたら、なんとタヌキだったんだね。

その皮を首巻きに作って、家の長押<sup>なげし</sup>にしばらく掛けてあったの覚えているのしゃ。

むかしは、こういうことがしょっちゅうあったね。